

五代友厚と堂島米商会所

——明治13年3月、4月限売買中止一件——

津 川 正 幸

I

五代友厚が明治初期のわが国経済社会に残した足跡については、文明開化の先覚者として、企業経営近代化の指導者として、「東に渋沢、西に五代」と評されていることをもって、彼の果たした役割の偉大さが理解されよう¹⁾。

明治期の五代友厚と大阪の関係は、明治元年5月、大阪府権判事にはじまり、明治18年10月2日の葬儀で終わるが、明治2年7月、官途を辞し、仮居を大阪市東区梶木町5丁目に構えてから後の五代は、まさに関西財界の先頭にたって、企業経営の近代化と中央政府との連携仲介、政策献言、請願の斡旋をはかる指導者であった。五代友厚といえば、鉱山業と製藍業といわれるように、彼の事歴の前半期は、2年10月、西成郡今宮村の金銀分析所の開設、同3年、大和国天和・赤倉・枳尾銅山、駒埴辰砂鉱、近江国蓬谷銀山の開発経営、6年、北区堂島に弘成館創設、7年、福島県半田銀山、岡山県新慶・和気銅山、兵庫県大立銀山、奈良県大久保銅山、三重県水沢鉱山、大分県神崎銅山、島根県豊石銅山、鹿児島県鹿籠金山・助代銀山の経営にみられるとおり鉱山業に重点がおかれ、後半は、明治9年、堂島浜通りに朝陽館を創立、製藍業に着手するとともに、同年堂島米商会所再興に、11年には大阪株式取引所、大阪商法会議所の創立、13年大阪商法講習所、14年大阪製銅会社、関西貿易会社設立、17年阪堺鉄道会社、神戸棧橋会社の創立、三菱商会と共同運輸会社の合同

1) 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第1巻序文

の画策と、取引所、商法会議所、貿易・運輸企業への関係と多彩になってくる²⁾。

ところで、『五代友厚伝記資料』に、新谷九郎氏が「いままで五代といえはすぐ藍と鉾山の経営を連想するほどであって、米・洋銀相場との関係はほとんど問題とされず、彼には大相場師の一面があることが見落とされている」³⁾と指摘されているように、少なくとも大阪株式取引所と堂島米商会所にとって、大相場師はともかくとして、その創業あるいは再興、あるいは関係条例の改正、取引には、極めて関係深い事項が多々ある。すでに、拙稿「大阪堂島米商会所の創立」⁴⁾、「大阪堂島米商会所の取引方法と実況」⁵⁾において、五代と米商会所のかかわりあいの若干についてふれたが、いずれもその詳細はあきらかでない。ここに再び稿をおこし、とくに明治13年4月限売買中止一件と五代友厚との関係を考察しようとするものである。

II

いうところの、4月限売買中止一件とは、明治13年3月29日、堂島米商会所前場立会、期米取引において、前日來の取引に乱高下の相場を呈し、おだやかでない状態を察した会所役員は、申合規則を適用して、取引を中止し、双方の売買約定を確実にするために、追証抛金の徴収を発表した。これについて、翌30日、4月1日に、府庁、常平局へ出された始末書および上申書をあげると、

3月30日、大阪府并ニ大阪出張常平局へ、左之届書奉呈セリ⁶⁾

相場中止ノ始末書

1. 本年3月限・4月限・5月限此3期トモ、本月29日例刻売買発会為致候

2) 前掲『伝記資料』伝記28—43ページ

3) 同上、書翰解説69ページ

4) 関西大学『經濟論集』17—6

5) 同上、18—4

6) 関西大学図書館蔵『堂島文書』1—99、4月限売買中止一件、明治13. 3

処、4月限立会ニ於テ、11円以上ノ声モ在之、又7円内外之声モ在之、更ニ
 確明不仕、実ニ公平之取組ト難看認ニ付、双方追証抛金ヲ徴スルノ目的難相
 立、此ノ場合ニ際シ、会所役員ハ、売買米双方ヲ保護スルノ責任ヲ免レサル
 モノナレハ、右売買ヲ一時中止シ、双方ヨリ、相当ノ増証抛金ヲ為差入、然
 ル上、接統発会為致候外無之段、協議決定仕候ニ付、3期売買米トモ中止ノ
 上、4月限取組米ニ限り、申合規則第4条2項、及同第5条ノ趣旨ニ抛リ、
 売買双方トモ、建米拾石ニ付金25円宛、臨時増証抛金トシテ、同日午後5時
 限可差入旨、市場所へ揭示仕候義ニ御座候。猶其以後之実況ハ、追テ何分之
 義上申仕候得共、不取敢前頭之始末奉申上候也

明治13年30日

大阪堂島米会所

大阪府知事 渡辺 昇殿

役員 連 署

大阪出張常平御局

上 申 書⁷⁾

本年4月限売買米、3月29日ニ於テ、例刻発会為致候処、其相庭異常ノ乱高
 下ニテ、穩カナラサル勢況ニ付、会所役員ハ、已ニ入米在之結米ヲ保護スルノ
 点ヨリ、直ニ之ヲ中止シタル処、本年3月17日ヲ以テ、上願セシ規則改正ノ事
 項ハ、許可可相成候条、即日ヨリ実施無差支旨、3月29日御府庁及大阪出張常
 平局ヨリ御達令在之候ニ付、午前10時其旨ヲ市場所エ揭示仕候。然ルニ前陳中
 止ノ上、兼テ会所ニ建米在之、双方ノ約定ヲ堅固ナラシメンタメ、申合規則第
 4条第2項、及ヒ第5条第1項ノ旨趣ニ照抛シ、4月限取組米売買双方ヨリ、
 臨時増証抛金トシテ、米拾石ニ付更ニ金25円宛、同日午後5時限り可差入旨、
 午前10時30分市場所へ揭示セリ。此場合ニ臨ミ、仲買人ニ於テ、改正規則実施
 ノ義ヲ既ニ確認シタルモノナリ。然ルニ、右時限ヲ怠リ、入金セサル違約人
 ハ、無論申合改正規則第7条第1項（申合規則改正願書ニ第8条1項トア）ニ照シ
 ルハ全ク第7条1項ノ義ニ御座候）ニ照シ

7) 関西大学図書館蔵『堂島文書』1-99、4月限売買中止一件、明治13. 3

断然処分決行可仕候。尤平常之処分方ニ於テハ、決行已前其処分方ヲ上申可仕義無御座候得共、這回ノ事変ハ非常ノ義ニテ、違約人ナルモノ 数名在之候ニ付、為念此段上申仕置候也

明治13年 4 月 1 日

大阪堂島米会所

役 員 連 名

大阪府知事 渡辺 昇殿

以上のように、3期売買（3月限、4月限、5月限）のうち、中限の4月限の売買を中止した一件である。その後4月2日立会を再開し、当限である4月限については、新規に建米をさせない条件で発会したが、中限・先限（5月限・6月限）とともに、期米取引は増加、加えて相場は奔騰、この趨勢は大阪のみならず、各地米商会所も同様で、ここにいたって政府は、4月12日、「追テ其筋ヨリ何分ノ違有之候迄停止」の命令を発するにいたった。

ところで、この一件については、新聞、雑誌に種々報道された。しかも、そのいずれもが、五代友厚一派の売リたたきと、磯野小右衛門一派の買あふりにふれ、諸説紛々、評価もまたさまざまである。会所頭取であった芝川又平の遺事を記した筆者⁸⁾は、「五代友厚一派は社会政策的見地より、貧民救済のため売方となり猛烈に売リあびせたり」と、売方となった理由を評価し、渋沢栄一伝記資料⁹⁾は、東京経済雑誌の記事をあげて、「五代友厚等政府ノ意ヲ受ケ大阪堂島米商会所ニ於テ定期米ノ売抑ヲ試シシモ失敗ニ終リシコトアリ」と判定している。いずれにしても、五代友厚一派と記される関西財界の動きについて、まず、「売買中止一件」直後の新聞記事と、同一件が裁判にもちこまれ、そのなりゆきが注目された同年12月の雑誌記事の双方をあげ、今一度、該件のなりゆきをふりかえってみよう。

8) 芝川又四郎『芝蘭遺芳』

9) 『渋沢栄一伝記資料』第14巻

堂島米相場五百丁の乱高下

腕づくの喧嘩、遂に立会中止¹⁰⁾

〔4・2、東京日日〕去る29日に大阪堂島の米商会社にて立合中、俄わかに中止になりし由は同地より再度の電報にて其端緒を掲げたるが、猶ほ1昨31日の中外物価新報并に去る30日の大坂日報等に、此の前後の景況を委しく記したれば、抄録して諸君にしめす。

大坂堂島米商会所は非常の乱高下ありしにより相場を中止せし由は諸新聞に記せしが如くにて、まだ子細の報知なけれど、一体此起りを尋ねるに、当節大に投機売買の流行するに連れ各地の農家及び農にて商を兼ねる人々は、米を買へば何程かの金儲けを為し得るにより、近来各地の農家は皆米を持ち堪ゆる力を生じ、一時に正米を売出すは却て損なることを知り、敢て売出す模様なく可成丈け之を持堪へんと謀る程の勢力を生じたるは尤も慶賀すべきことなりしに、各地の投機者（此内には農家及び農にて商を兼ねる人等もあり）は此事を窺ひ知り、且つ銀貨の騰貴と外人の買入等を見て買へば必ず勝利なりと、兎角人氣は買流行に至り誰彼も買はぬものとはなく、為に此豊年に当りても無暗に相場の騰貴を起したれば、益益農家は売惜む工合にて、其れが為め下民の難渋は暫く措き、遂に職工の手間賃も騰り諸工業も起らざるに至るも知り難ければ、少しく此高気を挫くことこそ宜しからめと2月上旬の事なりしが、該地有名の某が発意に応じ急ち四五輩の豪商相集り、諸国の米を買集め4月限へ売掛けたりしに、之に迎ひ出てくる買人は益々多く、就中桑名にて有名の米商魚次と云ふ人あり、此人は昨年来東京其外にて30万円も利益を得たりと風説ある人なりしが、一方の旗頭となり播州其他の諸商人数百名一時に買手となりて挑み合ひ一大争場を開らき、非常の乱軍にて人々の奔走一方ならず、双方龍虎の勢ひをなし更に敗色を顕さず、其中には天を睨んで怨ずる人あり、或は風雨を憂へて哀しむ人あり、一喜一哀其状恰も狂人の路傍に吟ふが如くにして遂に其取組

10) 『新聞集成明治編年史』第4巻、188ページ

も15万石程に達したりしが、売手の勢ひ強くやありけん4月限は一旦9円10銭以上なりしも8円7,80銭の下落を見たり。頃しも東京にては9円50銭までも騰貴せしが、買人の桑名商人中、大坂の相場に声援せしものありて、買持ちの売逃げ等ありて2月26日頃は兜町9円まで下落せり。併し其後とても一体の人氣は強氣がちにて兎角騰貴に傾くべき有様なりしが、大坂も又買手の旗色甚だあしく、いとゞ危く見えたりしに、兵士たる米を九州中国北国等より頻りに買入れ、それを漸次に運送し来り、一処に集るもの無慮数万石に至り、加ふるに東京にても売手の米到着ありしより兩地とも3月限の渡米に取懸りしに、買手もさるもの弱身を見せじと東京にて7,000余石の買持ちに、尚ほも買添へ引受けんと勢ひ猛く見えたりしが、大坂にては3月限の取組至て少なかりしも、売手は此機をのがすなとて29日に無暗に売掛けしにより、終に買手の敗色を顯はし左までの準備もなかりしにや、京坂兩地の取渡米にて忽ち証拠金に行つまりしが為めに9円40銭までに取引ありしものを6円代に下落せしかば、米商会所は直ちに相場を差留め罰則に照らして違約のものを除名し其後未だ開会なき由。又買手も已に3月にて弱身を見せたれば、4月限は大石の受渡し如何あらんか。今朝の電報にては双方専ら示談中との事なれば、多分売入の買戻しとなり平穩無事に治り申さん、是にて幾分か投機者の買氣を挫き、以来は無暗に空相場を買立するものなきに至れば、此戦争は何程か功能ありしと云ふべし。又た売手の人々をして此の勝利に乘じ売買とも益々空相場に進入せんとする念慮あらしむれば、我々は投機の売買流行を歎息するの外なかるべしと雖も、思ふに是等の人々は必ず此挙に乗ずるが如きことは無かるべきなり（以上中外物価新報）

近来米価の高低は人の意思の外に出ること多きは、何ぶん4月頃には異変あるべしとの見込に違はず、一昨々日（28日）二番の仕舞相場にては兵庫、大津、京都、東京とも相場を見合せ、多分昨日になると9円代なるべしと見込し処ろへ、誰云ふとなく昨日神戸港に支那米の多分に廻着せしと触せしより、売出高は20万石に至りしとの詞と共に寄附7円の声となりしに、猶ほ押下て6円50銭6円とまで聞えしが、その売方は同所に豪名ある松下正太郎、浜崎伊七、

加賀正平、備中豊蔵、山脇常三郎の面々、且つ五代、住友諸人なりと聞えければ誰ありてか是に应ぜざらんや。我も我もと共進するを同所の巨擘たる長谷川彦太郎始めこれを心配し、兎に角4月限の分を買入れこの勢に当らんと試みたれども、売手はますます劇しく制することならず、斯る処へ其向ふに抵る者どもは、是をこち上て11円50銭となし、午前9時より20分間に13円までの声しければ、又々双方の紛紜を増長し容易に治まる様もあらざれば、会所には此上は其筋へ掛るより外に方なしとて警察署へ依頼し、纔かに填咽の混雑を散じ現場商売を止めて引分たれども、問屋々々は唯眉をひそめて示談するのみにて漸く5月限は8円64、5銭と決したるも、買手に追敷を乞ふの手法は前敷の上現相場にて100石に付き250円、10万石に見て昨日（29日）午後5時まで50万円なる由にて、売方は場立8歩買手は2歩と見做せし由なるが、夫に付ては最寄は車価^{しやか}為めに高しと云ふ程の勢ひなりと云々（以上大坂日報）

右に付き記者が昨日聞く処に拠れば、遂に買方より降を乞ひ8円10銭にて解け合を申込みたれば、売方は6円（低直）と8円（高直）の間を取りて7円50銭位ゐるならでは聞入難しと云ひ張りたるが、其中人も入りて多ぶん右の8円10銭にて和睦の調ひたるべしと云へり。又前号の電報にも物価新報にも見へたる60余名の除名と云ふは、此間金が出来ざりし者のことならんと云ふ。

明治13年2・3月

紙幣ノ濫発ニ伴ヒ米価ノ騰勢甚シキヨリ、五代友厚等政府ノ意ヲ受ケ大阪堂島米商会所ニ於テ定期米ノ売抑ヲ試ミシモ失敗ニ終リシコトアリ。栄一モ之ニ関与セルカ¹¹⁾。

東京経済雑誌 第48号・第1,083—1,085頁
〔明治13年12月25日〕

○去る15日午後2時堂島米商会所頭取芝川又平・副頭取玉手弘通・理事角田富三郎の3氏は、大坂裁判所検事局より拘留となり、同所の米商浜崎伊七・

11) 『渋沢栄一伝記資料』、第14巻、234—235ページ

冒頭にかゝれた、芝川外2名の役員は、明治13年12月14日検事局より召喚された、『堂島米商会所日記』(2)、116ページ

松下庄太郎は帳範を徴集されたるが、此事件は本年3月米相場の乱高下なりたる時同会所は規則に照らして相場を中止し売買双方より増証拠金を取りたるに、買方はその証拠金を出す能はずして身許金を没収されしものを不当の処分なりとて大阪裁判所へ出訴せしに、原告の申分立ず、依て代言人小島忠里氏に委任して高等裁判所に扣訴せしも同じく申分相立ずとの裁決を受けたれば、小島氏は之を不当とし大審院へ上告せり、然るに同院に於ても遂に上告状を却下せられしかば、原告方は代言人茂手木慶信氏と謀り堂島にて日々の相場気配状中に記載ある中止時間を故らに改ためさせ、猶規則改正済ありし時間を米会所より増証拠金云々の掲示をなせし時間より後れたる体にこしらへ、是を原告方へ受取り則ち証拠ものとして検事局へ差出したるより漸く受理せられて、米会所役員を取調べありしに、米会所にては該気配状の真正ならざるを覺り、之を当日発兌の分に照し各地方へ存在せしものをも取寄せますます偽物たるを認め直ちに発兌人に就て尋問せしかば発兌人は遂に原告方の依頼を以て故らに印行し遣わしたる旨の書面を出したるより会所役員は其段検事局へ申立し趣き、右に依て同局にては其時間の前後實際を取糺さるゝが為め斯くは着手ありしならんか、また同時に、社長本庄氏の宅へも何等御見合せの為に書類臨検として大阪府警察掛岡田某外2名出張され、堂島諸問屋よりの相場報告書並に東京・兵庫・久留米等の来信中米の字の付たるものと、瓊江義塾にて昨年冬至易に天下の形勢を占筮したる書付とを取纏めて持帰られたりと大坂新報に見ゆ、又た大坂日報の記する所によれば、堂島米商会所頭取芝川・副頭取玉手・理事角田の3氏か許多の人を苦しめし報ひ終に検事局へ拘留せられたる始末は、去る9月代言人茂手木より芝川等を相手取り検事局へ告訴せし砌り本紙に掲載したれども、尚ほ此に關したる事柄を記し彼の奸譎の徒をして其肝胆を寒からしめんとす、芝川外2人の検事局へ拘留せられたるは午後3時頃にて警察本署よりは同時に探偵吏を諸方に派出せり、抑も本年3月彼米相場の乱高下を為さしめ遂に今日の獄を起さしめたる者は五代友厚・本莊一行氏等の計に成り、殊に五代氏の意を承け尤も力を尽し尤も利を得たるは本莊一行氏にして、芝川等は

五代・本荘の意に成りたる改正申合規則を執行し、其規則によりて五代・本荘等売方の狡計譎謀を逞ふせしめ、他の一方の金を捻ち取て其慾を厭かしめたるなり、左れど責は元師に在り、公許会所の頭取役員にして如此事あらしむる者は争てか之を逃るゝを得ん、進んで売方の奸黠手段と乱高下を致したる始末を記さんに、彼の五代氏等の仲間は本年1月以来頻りに3月限りの米を売出したるに、米価は売れば売程登貴し其失敗容易ならざる勢なるより、五代氏は堺県下商法会議所の議員等に説き援兵となし、堂島にては仲買人某等を引き込み益々売出さしめたと紙幣下落に付て米価の高直なれば俄かに売り下くへくもあらず、又正米を買入れ3月限は現米にて受渡さんと計り現米買入に着手したれども、当時府下には34万石よりあらず、売出の高に対して45分1にも足らざれば此計も出来可くもあらず、是に於て又一策を按出し、本荘は申合規則改正追加の按を草し窃かに五代其他の売方と相議し五代・広瀬二氏は早くも府下の銀行へ手を廻し25日以後の入金は悉く日歩を附して縛り置き、五代等は斯く其用意を12分に整へ29日の早天より寄付8円30銭より売出し竟に6円50銭まで引下たり、左れとも買方数10名は尚屈せず撓まず買込たるが、兼て本荘と打合せたりけん時分はよしと此会所は今日乱高下は穩かならざるなりとし相場を中止し、彼の改正規則に依て買方を一撃の下に失敗せしめたりと」又大坂の或局より東京の其筋へ電報を以て当時当地にある五代友厚氏呼出しの儀を掛け合はれしよし」右に付きては随分関係人も有之、中には逃げ匿れして身を晦ますものもある由に聞けり、何れにせよ近頃の一大事なり、然るに諸の風説区々紛々にして未だ確たる報道を得ざれば猶詳しき事は聞き得て後に記すべし。

さて、以上2編の記事で、4月限売買中止一件の概略は察知されよう。ところで、さきに掲げた東京日日紙の記事は、中外物価新報と大坂日報紙の記事の抄録とするされているが、大坂日報紙については、この一件記事に関して、後日、堂島米商会所副頭取玉手弘通をして、「殊ニ日報ノ如キハ妄誕甚敷、会所及ビ株主ヘノ義務ニ対シ、他日、聊、日報ニ戦鋒ヲ不試ヲ不得義ト、愚考仕居

候」とまで言わしめた程に、米商会所に対し、買手一派の側にたつての責任追求と、その時にとられた措置への批判がきびしく述べられている。他方、経済雑誌社の東京経済雑誌¹²⁾については、自由主義経済—自由放任主義を堅持する田口卯吉によってはじめられたものであり、彼田口は、明治12年12月、東京経済雑誌第16号に、「米商会所論」¹³⁾の1文をよせ、「相場会所の商業に欠くべからざる所以のものは相場を平均するの功用是なり」とし、限月相場を博奕類似のものとみて、禁止あるいは干渉することは、「余幣を以て其本体を減せんと欲す、是れ猶を火災を恐れて、吹烟を禁ずるが如し」と述べ、あるいは、のちに15年3月、「続経済策」第19章に、「米穀取引の正法」¹⁴⁾において、「我が財政要路の意見は偏に米商会所を以て公然たる賭博場なりと爲し、嘗て紙幣の下落せるに着目することなく、米価の騰貴は一に米商会所の致す所なりと認定し、或いは全く限月売買を禁止し、或いは一時営業を停止し、以て米価騰貴を防がんと欲し、其極終に米穀限月の売買を商業上より奪却し去らんと欲する勢なきにしもあらず云々」と論述し、終始、取引所弁護者の立場から、政府の干渉を批判する論説を展開しているだけに、この記事においても、後段において、大坂日報の記事として、「五代・本莊等売方の狡計譎謀を逞ふせしめ、他の一方の金を捻ぢ取て、其慾を厭かしめたるなり、左れど責は元師に在り、云々」と、「本莊の意になりたる改正申合規則の執行」、事前の工作としての、五代・広瀬二氏の府下銀行への手配による金融梗塞、を「風説区々紛々にして未だ確たる報道を得」ずとしながらも、何の説明もなく再録報道していることは、政府と有力者の結託による作為を批判するものと受取らなければならない。すなわち、「何となれば今の米商会所は専売特許の最も有害なる者」であるとし、後日¹⁵⁾、その組織を「不完全の極」と田口をして述べしめたほどで

12) 杉原四郎著『西欧経済学と近代日本』第2部、第2章、124ページ

13) 『鼎軒田口卯吉全集』、第4巻、6ページ

14) 『鼎軒田口卯吉全集』、第4巻、64ページ

15) 東京経済雑誌340号「取引所の組織如何」

米商会所の在り方は、「全く条例の検束を除きて、人民をして随意に此取引を為すを得せしむべき」ものとの考えからである。

ところで、他方において、新聞・雑誌記事とは別に、前記のとおり「社会政策的見地より、貧民救済の為め」との評価もあるわけである。明治12年夏以来の社会情勢をふりかえてみると、12年には患者総計16万8千人死亡10万を越ゆと報ぜられたコレラの流行、そのために起きた埼玉県北足立郡中尾村外31か村騒擾、愛知県熱田駅一色村・鴻崎村、豊浦村・平坂村・津島村、新潟県北蒲原郡下条村、その他各地の農民騒擾があり¹⁶⁾、かてて加えて米価ならびに諸物価の騰貴により、新潟町、中蒲原郡沼垂町の如きは、8月5日から10日にかけて、4、5円の米価が8円5銭と倍に沸騰したことと、コレラ病予防のために魚類販売禁止令などを原因に、新潟港の住民が米商の打毀し、放火の暴動をおこすにいたった程であった¹⁷⁾。各地とも米価騰貴の例にもれず、庶民の生活困窮に迫車かけられたが、大阪においては、9月ついに12円50銭に暴騰。府下各区では戸長はじめ有志の貧民救済事業がすすめられた。こうした時に、住友吉左衛門は、大阪商法会議所へ、

米価非常之騰貴ニ付願書¹⁸⁾

米価騰貴ニ付キ、目下府下一般ノ細民ニ至テハ朝饔暮食ニ不足シ、稍市上ニ號泣セントスルノ窮況実ニ見ルニ忍ビザルノ秋ニ御坐候。就テハ之ヲ傍觀スルニ由ナク、取敢ズ救恤ノ為メ多少ノ金額ヲ差出シ申度相心得候得共、府下ノ広キ細民ノ多キニ対シ、些々タル金員ヲ以テ普ク之ニ及ボス能ハズ。幸ニ其御会議所ニテ、過日議事ヲ起サレ、深ク御配慮ニ相成候趣伝承仕候ニ付、下拙ニ於テモ応分ノカラ尽シ申度奉存候間、該同盟中ニ御差加ヘ被成下候様此段奉伏願候也。

との願書を提出し、会頭五代友厚の了承をえている。

16) 土屋・小野編『明治初年農民騒擾録』

17) 同上、および前掲『明治編年史』89ページ

18) 前掲『明治編年史』105ページ

貧民救済のための米の廉売については、堂島仲買人柳利作が所有米1,500石を提供し、鴻池、三井をはじめその他有志の拠金により、1升9錢1厘で売出した事例もある¹⁹⁾。

第1表 常平局各年度米穀出納一覧

| 年 度 | 買 収 | | 払 下 | | 輸 出 | |
|-------|---------|-----------|---------|-----------|---------|-----------|
| | 石数(石) | 代価(円) | 石数(石) | 代価(円) | 石数(石) | 代価(円) |
| 引継有米 | 339,051 | | | | | |
| 〃 小麦 | 18,736 | | | | | |
| 明治 11 | 160,326 | 817,199 | 204,859 | 1,105,670 | 115,075 | 541,307 |
| 12 | 147,683 | 1,083,181 | 122,483 | 951,374 | 19,102 | 159,584 |
| 13 | 223,577 | 2,222,000 | 61,003 | 663,535 | 2,228 | 25,773 |
| 14 | 259,728 | 2,687,324 | 19,610 | 192,739 | 134,064 | 1,264,515 |

註 各年度は7月1日から始まり翌年6月30日でおわる。

他方、明治11年7月1日、大蔵省出納局から事務を引継ぎ、活動を開始した常平局は、開業早々ようやく米価は漸次騰貴の傾向をみせるにおよび、第1表²⁰⁾にみられるとおり、引継有米約34万石のうちから、11年度に20万4千石余、翌12年度に12万2千石余を払下げ、米価の騰勢緩和につとめている。明治12年度は、前年度に比して、払下石数は半減していながら、その代価においては僅か20万円たらずの差しかない点は、同年度後半の明治13年5月の東京払下代価石当たり10円20銭の値段をもって、全般の米価、払下げ代価さえもが、前年に比して騰貴していたことが推察できよう。続く13年度においても、米価騰貴の絶頂であって、常平局の買収が思うに運ばず、貯米の少なかったこととあいまって、払下石数6万1千石に対する代価66万円余の数がでたわけである。

同12年、大阪においては、8月22日、渡辺昇府知事達に²¹⁾「目今米価騰貴人民の困難不少、依之常平局に於て貯米時々入札相成候処、之を幸ひに一己の

19) 関西大学経済・政治研究所刊『堂島米商会所日記』(2)、55—59ページ

20) 大蔵省理財局『明治年間米価調節沿革史』

21) 前掲『明治編年史』93ページ

第2表 常平局大阪出張所払下け米状況

| 難 波 倉 | | | 兵 庫 倉 | | |
|-------|----------|-------|-------|---------|-------|
| 日 時 | 銘 柄 | 石 数 | 日 時 | 銘 柄 | 石 数 |
| 8月5日 | 寅越中, 羽後米 | 2,000 | 8月11日 | 播磨, 備前米 | 2,000 |
| " 13日 | 摂津, 越中米 | 2,000 | " 15日 | 肥前, 豊前米 | 1,500 |
| " 18日 | 越中, 摂津米 | 2,000 | " 21日 | 寅年米 | 1,500 |
| " 25日 | 寅年米 | 2,000 | " 27日 | " | 1,500 |
| " 29日 | " | 2,000 | 9月4日 | " | 1,000 |
| 9月2日 | " | 3,000 | " 16日 | " | 1,000 |
| " 6日 | " | 1,500 | " 24日 | " | 1,000 |
| " 11日 | " | 3,000 | 10月6日 | " | 1,000 |
| " 13日 | " | 3,000 | | | |
| " 18日 | " | 3,000 | | | |
| " 20日 | " | 3,000 | | | |
| " 26日 | 丑寅年米 | 3,000 | | | |
| 10月2日 | " | 3,000 | | | |

利を謀り候様の者有之候ては不相済義に付、必心得達致間敷……一般人民の困難不相成様可致」との説諭があり、8月5日頃から、払下米の入札払いが実施されている。難波米廩の払下げ状況を『堂島米商会所日記』にひらうと、第2表²²⁾のとおり、2～3日間隔で、頻繁に払下げられていて、記録が10月以後を欠くため阪神の総払下石数は不明であるが、2か月間で、大阪難波倉のみでも、3万2千5百石、兵庫倉分を加えて4万3千石の払下げで、この年度の総払下石数12万2千石余の3分の1を払下げているわけである。

III

以上のような状況の中で、五代友厚が如何に行動したか、誠に興味深いものがある。しかしその行動の逐一を知ることはできない。幸いにして、明治13年新春から4月にかけて、友厚が、大隈大蔵卿、河鰭大蔵少書記官（常平局大阪

22) 前掲『堂島米商会所日記』(2), 明治12年分

出張所)に差出した書状²³⁾、あるいは配下、笠野熊吉その他から受取った書状²⁴⁾によって、概略を推察することができる。

410

新年の御慶事、申収候。先以、弥、御安康御加年可被成御座、欣賀奉恐悦候。

陳バ、旧冬滞京中は、不相替、非常の御厚志を蒙り、只々恐縮不堪、厚御礼申上候。早速御礼可申上筈の処、帰坂スルヤ四方より雑事を以被相迫、多忙を究、乍存御無沙汰申上候。

1 旧冬の景況は、近年不聞る不融通にて、坂地拾六行の銀行、何れも金融の道相付不申、実ニ切迫の模様。三井銀行も、四方より為替相屯り、殆困難の際ニ相迫候処、幸、彼暫時御拝借云々にて、漸、相凌タル模様。1月ニは、猶一層の不融通と申事とて、各銀行も撫然タル模様ニ有之候。当今の不融通にては、金5万円を抵当と致、10万円の紙幣を借ルモ不出来、各銀行の景況、実ニ不融通を究申候。右ニ付、左の目的を上申仕候。

1 各銀行如何と云へども、市中は少々金融も有之、公債現物を買ひ候もの
西京は中
ニも多し、此目的は只今不融通にて公債下落スルモ、2、3月ニ相成、金融相付候ハズ、又公債高値ニ復スルと云、見るものに御座候。依之、旧冬12月ニ御買取相成候分20万計、未、名前も不切換請取タル姿ニ有之候間、此分を手を廻し、秘ニ御売相成ては如何。然ば、必、此金融、弥、相迫可申候。右の分、若、御損失を御厭相成候はズ、下落の後、御買戻相成候て、決て御損相成不申候。現物相場平均にて、6円6、70銭位ニ有之候。此機会ニ乗、不融通を促候時ハ、忽、其効を奏可申候間、少々御損失、御回顧の時ニ無之様奉存候。可然思召候ハズ、至急、電報にて河鱈へ御内命被下度。

今日は米初相場の処、旧冬ニ比スレバ、20銭程相下、人気不融通、金ナシヲ

23) 24) 日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第1巻、書状の最初に付した番号は、同書の整理番号である。

唱、大ニ弱シ。今一層不融通を促候時ハ、洋銀と米は、自、昇降相離れ可申候。此不融通は、特リ大坂のみニ無之、過日ハ松山岩三郎上坂、備前辺の景況も如斯、摂津地方も最甚シ。此際ニ当リ、京摂間ニテ、5、60円も紙幣を引上候時ハ、真ニ紙幣は不足なるを研知可仕候間、断然御決案奉希望候。何は捨置、至急奉伺度、正ニ如此御座候。頓首々々

(明治13)

1月5日

松 陰

重 信 様

412

尚々、是非今回の大事業ヲ掌握不致候ては、大一、本文申上候通りの次第ニ付、御深考可被下候。

17日御仕出の御信書相達、奉拝誦候。益々、御安康被為居、奉恐悦候。御申越の件々、逸々承知仕候。万端、御厚配ヲ蒙リ、奉厚謝候。何分亘敷奉願上候。然ば、金子の儀、米方10万円、第一銀行へ預ケ有之候間、御下命次第御用立仕候様、商会留主居のものへ申聞置候。右の内、本月末、5万円御指図ニ任御渡し方申上候趣、電報ヲ以申参り候。其前、三井銀行へ1万預金有之趣、申上候趣申来り、右の米方の金ニ無之、別口ニ御座候ニ付、尚其趣、今便、商会へ申越候付、御聞取可被下候。

(中、3項略)

- 1 本年米は、格別引下げ候見込無御座候ニ付、売込方は格別不面白やニ被存候。如何トナレバ、洋銀の騰貴、実ニ可驚、是ニは大蔵も一方ナラヌ御心配、誠ニ種々、世上ニ義論不堪、不日、井印へ面会の積、此辺ニテ何か云々共は無之やと、大ニ疑念ナキシモアラズ、尚跡より可申上候。
- 1 本月談判の形行ヲ、御通知可申上候也。

(明治13)

1月26日午前

(姓不明)
五 松

松陰尊台

413

愈、御安康奉恐賀候。陳者、地方官會議ニ付、吉田豐文本日出京仕候間、京坂の事情御聞取被下度、当月は、不相替、不融通ニて、当所各銀行は、万円のお金スラ遊金無之、余程困脚の場合ニ御座候。然ルニ、米価は再高値ニ相成候得共、玄米は倉敷の外、決して不相動、全、空相場の為ニ騰貴ニ趣キ、折柄、兵庫ニて1千5百石程輸出の唱有之候より、小前共ハ、無法ニ買進候事ニ相聞候。

併、当年ハ、幸ひ、買方ニ金力有之候者乏人無之、有力家は反て連合の力を以、是非相下候事ニ尽力罷在申候。就ては、何方も金融不弁ニ付、玄米の不相動ハ、即、相場の下落を兆候儀と存申候。

当地公債は、金融不弁より、各銀行共勿論、公債貯居候金力家、何れも売出候景況ニて、如斯下落を兆シ申候。何れ、来月初旬ニは、御下坂と奉存候間、猶、事情可申上候。

東京ハ、政躰上の御変革有之との説粉々ニて、其内ニハ、注意可致策略も有之候やと被存候間、随分、御注意奉仰候。今日の処ニては、吉原を御招呼、探偵御申含有之候ては如何。滞京中、同人ニは、懇ニ申含置候儀も有之候付、決して、御掛念ハ無之と想像仕候。不遠内、御下坂と存候得共、喋々掛念不少候付、任幸便、不取敢、申上置候。恐々敬白

(明治13)
1月27日

松 陰

重信様 侍史

416

拜啓仕候。陳者、過日、渡辺昇帰坂。此度、堂島の一挙ニ付、種々御不足の御沙汰を蒙候趣キ、渡辺ニも大ニ驚キ、秘ニ相通シ、甚以、恐縮仕候。加ニ、右云々の内、閣下より被相頼相場相始候趣、と迂生相唱居候様、申触候由、実ニ驚入申候。乍併、實際ニ甚遠キ巷説ニて、素より、御信用も不被下事と存候得共、致愚案候処、此説ハ、余程、意味遠謀のアルコトと想像仕候間、是非、出所御探偵被成下、北畠迄、極内御洩被下度奉願候。何となれば、将来を注意

可致旨事と愚案仕候。

且亦、於東京は、此節の一挙、大ニ信用を破り、悪説散々なるよし。閣下ニは、不容易御配慮を蒙候儀と、深御推計申上、今更、不得止事に候得共、只々恐縮仕候。何れ、来月初旬ニは出京、御直ニ御託可申上候。猶亦、河鰭儀、此度、俄然、更代被仰付、已ニ明日出立仕候由、余り俄の御下命ニ付、当人も御趣意のアル処を不知、或は何ぞ拙策ニても致シタルカ、ト内心痛心の姿ニ相見へ、於迂生も、兼て御信用厚キ仁ニ付、或は他ニ御用相成候事か、或は堂島云々の為ニ悪説を蒙候事か、御模様不相分ニ付、乍陰も、専念罷在候。若、堂島云々の為ニ生候儀ニ付、交代被仰付候訳ニも候ハズ、迂生の心情甚不忍事ニ御座候。此度の一挙ハ、中途にて云々の趣旨を相咄候位にて、何も不存、悪評の生ズルハ皆迂生ニ関スル処ニ付、其御責問は迂生の罪ニ御座候間、明亮ニ御識別被下候様奉希望候。

元来、此度（の）一挙ハ、始より米価を制スルノ旨趣公然相唱、同志共同センコトにて（此時、迂生、只私心アル処、幾分カ米価下直ニナル時は、常平の御備米も出来ルト云フ意アルノミ）其創業ハ、迂生の発端ニ無之、堺商法会議所の旨趣、共進会も無益ニ属スルノ意を述、且米価高直ニ過ル時は、全国の財政を妨害スルトノ云々より、同行の連中主張致シ、迂生を以、裁決役ニ乞ひ候より生候儀にて、實際を明亮ニ御探偵被下候ハズ、迂生等ニは、聊、不恥の意有之申候。河鰭儀も、自（ら）見聞可有之候間、御直ニ御聞取被下度、此旨御託旁々奉得尊意候。敬白

（明治13）
5月10日

松 陰

重信様 侍史

632

高墨拝見。東京向の電報、態々、御洩被下、奉拝謝候。明日、若、相場高直ニ候ハズ、^{（月か）}3日限タゞキ候筈、13日ニは、兵庫及播州・備前三方より廻米相達申候間、堂島ニても、必、落胆可致、尤、播州・備前ハ蒸気船雇下候間、時日

遅延は不仕積り、此段も御含迄申上候。頓首

1月10日夜認

松 陰

河鱈様

754

兎角春寒難去候。先以、御安康御在京被為在、奉恐賀候。御着京後、例ノ通、御多忙ニテ御困却、御推計申上候。当地ノ儀、御出京後、米方種々ノ変化有之、其機ニ応ジ、臨氣ノ取計仕候。就テハ、東京騰貴ノ原由、時々御洩シ被下、尚、河鱈ノ咄ニ、昨日三井の誠司ノ咄ニ、東京渋沢、2万石買入、依之騰貴致候趣、申出の咄ニ御座候。是ハ已、広ク御承知ノ事と奉存候。又馬関ハ、物産ニ買方ニ相成、依て騰貴セリ。加ルニ島・古野・柳利の手ニて、神戸70番ニ8千石程売込、輸出ノ噂高シ。是ニハ種々云々有之候得共、筆紙ニ難尽。此等の響ニて、当地惣て買人氣勝ニ相成、何分ニも、困却^(次)の二第也。

乍併、又一策ヲ廻らし、爰ニテータヽキ不致候デハ、3月限リノ請渡ニ、大ニ得失在之候ニ付、売込方ノ策ヲ謀リ、則、初日ニ中原ノ手より為売出、500枚売積リニテ、勢ひ堂々ト見セ掛候処、此氣ニ押サレ、今迄ノ買方も引足ニ相成、漸300枚の売込出来、又一策ヲ設、今一クジキ致積リニテ、此度ハ売方ヲ二方ニ致、住友手口より500枚為売出、引続キ中原ノ手に売出候処、場面大イニ驕リ、爰ヲ付込ミ、極妙手ヨリ3月限リヲ引、此策ニテ、凡1万石余買戻シ、如意策略為行、又引続キ跡モ買戻シスル積ニテ謀り候処、豈図、別条申上候東京・馬関の響相聞候より、俄ニ騰貴、3月限リハ、追々上ザヤニ相成、5月限リモ同断。

此度礪野買入ニ相成、実ハ御出立前、同人ハ云々依頼も有之候処ニ、甚可悪人物ニ候。右ニ付、可成、手許ニ現米ヲ控候テ、策略不致候テハ、其効無之候。3月限リハ、都合能、買戻し出来候ニ付、今日の処ニテ、全ク渡前1万2千石余ニ相成、現ニ有米ハ2万5、6千石ニ有之候ニ付、是は、不残格付致シ候。依之、1万2、3千石ハ現米有之候ニ付、先以、是ニテ5月限リ売込の為

ニハ、莫大の力ニ相成候。未、当月限りモ、5、7日、日数有之候ニ付、切迫ノ際ニ至リ、一策ヲ施積リニ御座候。尤、当地ノ儀ハ、只、低落ノ策ヲ一筋ニ尽力仕候。16日御仕出し候御信書ノ通り、現米ハ不絶買付仕候。現今ノ至リ、何分強気ニ付、現米ノ売手も不少、何方へ手配り、先、一番利詰覚敷場所ノ伏木ニ付、直比も随分可也ニテ有之候ニ付、則買付ノ策ヲ立、爰ニテ不目立様、1万石位ハ買付度、手配充分ニ行届キタリ。予メ買付済ノ上、木ノ下指出積リ也。常平倉ニテモ、難波蔵にハ、5、7万石ノ米ハ、不絶御囲相成不申候テハ、策略ノ効ノ薄候間、此辺、尚、御弁解可然奉存候。当地ノ売込も勢ノ盛ナル時ハ、少し控、必、其内、少し警ノ気ザシ相見得候ニ付、其度ヲ不^(逸)透、打込不申候デハ、謀計も効薄き様ニ相考申候。先、此場ニテハ、兎角、現米買入ノ策、専務ノ事と奉存候。

- 1 物産と島・柳利・古野等は同穴ノ脚ニ被伺候。先日東京ニテ、北国ノ在米2万石ノ御買上ヲ願候手筋も分明致、実ニ油断大敵ニ候。

（中略）

3月23日²⁵⁾

笠野 熊吉

松陰大人

尚々、与倉公へ別段さし上不申、宜敷御伝声可被下候。川瀬公へも同断奉願上候

- 1 兵庫払米ハ、極秘密ニテ落札致、御安心可被下候。

最初の410書翰は、インフレーション下の金融問題についてのもので、米穀には関係はないが、国立銀行条例改正後のあいつぐ銀行設立によって、第3表²⁶⁾にみられるとおり銀行紙幣は漸増し、政府紙幣、銀行紙幣が市場に氾濫、正貨

25) 『伝記資料』415書翰、田中一兵衛より五代宛、明治13年4月20日付書翰の頭初に「最早此書面着の頃御帰館と存云々」の記事があり、家族の安否も伝えているので、3月23日当時五代は他行中で、大阪にはいなかったと考えられる。

26) 『明治前期財政経済史料集成』第11巻の1、204ページ

第3表 政府及び銀行紙幣流通高及び紙幣価格

| 各年末 | 政 府 紙 幣 流 通 高 (円) | 同 繰 替 発 行 流 通 高 (円) | 銀 行 紙 幣 下 付 在 高 (円) | 総 計 (円) | 銀 1 円 ニ ツ キ 紙 幣 (平 均) (円) |
|-------|----------------------|------------------------|------------------------|-------------|---------------------------------|
| 明治10年 | 93,835,764 | 11,961,327 | 13,352,751 | 119,149,843 | 1,033 |
| “ 11年 | 119,800,475 | 19,618,116 | 26,279,006 | 165,697,598 | 1,099 |
| “ 12年 | 114,190,804 | 16,118,116 | 34,046,014 | 164,354,935 | 1,212 |
| “ 13年 | 108,412,369 | 16,528,116 | 34,416,351 | 159,366,836 | 1,477 |

に対する紙幣相場は暴落し、金利の騰貴によって公債市価も下落するという経済状態で、金融は不融通、商工業者は資金難におちいった。その状況が、大阪の具体例として述べられている。しかしこのことが、先にあげた『東京経済雑誌』の五代友厚と広瀬幸平の、「早くも府下の銀行へ手を廻し25日以後の入金は悉く日歩を附して縛り置き、云々」の事態につながるかにみられる節もある。また、文中、公債20万の売出しによって、金融逼迫に追い込もうとする方策を勧め、その諾否、決行可否かを、電報をもって、河鰭までとの文面は、大隈⇔河鰭⇔五代のつながりを明らかにするものである。五代と河鰭のつながりは、632書翰でも明らかである。それも、「東京向の電報、態々、御洩し下され」という関係で、常平局大坂出張所から、東京本省への報告あるいは伺いの内容——それも電報をもって緊急に連絡すべき事項——、を内報し、されていたという関係である。

さて、412書翰の、「今回の大事業ヲ掌握いたさず候ては、云々」の、大事業とは何であったかは確かでないにしても、この書面には、この大事業のための資金準備とも思われる依頼に対する返答と、米穀、洋銀相場に関して、米穀売方は格別に面白からずの意見が付され、そのことについて、大蔵卿も憂慮されてる旨が述べられている。しかし、今回の大事業が、米相場の売りに出ることであったとすれば、それは、すでに開始されていたことであり、632書翰には「明日（1月11日）、もし相場高直に候はゞ、3月限たたき候答」と、売たたきの準備がととのい、「堂島にて、かならず落胆いたすべし」と、先の見通しをたて、自信満々の心情である。

そのことは、413書翰で、「幸ひ、買方に金力ある者1人もなく、有力家は連合して、その力で、是非、相場を下げることに尽力しております」と、大隈に書きおくっていることで知れよう。

さて、新春、初相場以来、売方・買方の攻防は、3月になって、愈々そのはげしさをます。754書翰は、五代の指令によって動く配下の1人、笠野熊吉が「ここにて一たゝきいたさずば」と一策をめぐらし、売り、買いの掛引を報じている。しかも、買方にたった磯野小右衛門を、笠野は、「はなはだ憎むべき人物」と敵愾心を露骨に出し、いよいよ「切迫の際に至り、一策をほどこす積り」と、それは必竟「たゞ、低落の策を一筋に力を尽して」おしすすめるためであり、そのための現米の用意が着々すすめられていた様子が伝えられている。

以上、410、412、413、632、754の5書翰によって、五代友厚が、明治13年1月～3月の期米売買に、如何に力をそそいでいたかが察知できるが、更に、それを決定的に証明し、政府一大隈大蔵卿と財政政策上での緊密な関係を示すのは、416書翰である。

ことの次第を、帰阪した渡辺昇大阪府知事から伝え聞きいた五代は、「此度堂島の一挙について、大蔵卿から不満の意が述べられ、渡辺と共に驚き、恐縮です」、ところで、堂島4月限売買中止一件とその関連事は、「大隈から頼まれてやっているのだと、五代が言っていたとの噂」を、五代は否定し、その噂をながしたことには、「余程、意味遠謀のあることと想像できるから、事情探偵して下さい」と申し越し、さらに、河鰭大蔵少書記官を常平局大坂出張所から交代させることについて、一件の責任は、すべて五代にありと、河鰭の立場を釈明している。

この書翰の後半において、五代は、堂島一件について、米穀相場引下げのために、同志連合して売り方に出た意図を、「始より米価を制するの旨趣を公然と相唱え」、堺商法会議所、共進会、その他、志を同じくする連中の主張は、「米価高値にすぎるときは、全国の財政を妨害する」ものであり、これが安定の

ために、五代を裁決役にと推薦したことで、「われわれには、いささかも恥じる事なし」と断言している。彼五代が、政府の手先であったか、はたまた大相場師であったか、五代に対し、大隈につながる虚偽の噂を流布し、五代をして「余程、意味遠謀のあること」と述べしめたことは、いわゆる「明治14年の政変」といわれる薩長閥の反対派への措置への予感か、413書翰で、「東京ハ、政軌上の御変革有之との説」のとおり、やがて同年3月、政府は内閣組織を改革し、大蔵卿は大隈から佐野常民へ、さらに松方正義へと更迭をかさね、財政政策において、明治13、14年は、「歴史における選択」の時点にたち、インフレ収束一デフレ政策へと転換するわけである。ところが、五代は薩摩人でありながら、藩閥にとらわれず、豪放にして卓見、私慾なく清潔な人柄であったといわれる。このような点から、われわれは、この416書翰の内容を、まずは素直に受け取らねばなるまい。なお、五代に育てられ、あるいは五代に師事し、五代と共にあゆんだ人々から、4月限売買中止一件訴訟に関して、後日、書きおくれた書翰によって、一件の経過をわれわれは詳細に知ることができる。

(未完)

後記 本稿は昭和46年度文部省科学研究費（一般研究D）「近代における大阪堂島米穀市場」による研究成果の一部である。